

英語習熟度の2015年度内比較

The Comparison of CASEC Scores in April and December, Academic Year 2015-16

設楽 優子

Yuko SHITARA

向後 朋美

Tomomi KOUGO

要旨

本稿は、設楽・向後（2015）の2015年4月の新入生の英語習熟度報告と同年12月の結果を比較する。学科間の違いと習熟度別比率は概ね12月にも保存されたが、英語 I 以外に学内外のプログラムに参加しなかった平均的な学生の習熟度は12月には有意に低下した。CASEC内の4つのセクションの得点比率には、学科によって多少特徴的な変化があったものと考えられる。2008年以来全入学者の習熟状況は毎年急激には変化しないので、この習熟度状況を来年度のクラス編成や教科書選定に活かすべきである。CASECのような精度の高いツールはこれからも必要であり、大学として再び採用されることを希望したい。

1. はじめに

十文字学園女子大学では、2008年度から2015年度まで共通英語のプレイスメントテスト・アチーブメントテストとして「コンピュータを使用した英語コミュニケーション能力判定テスト（Computerized Assessment System for English Communication: 通称CASEC）」を全学の1年生を対象に4月と年度末（便宜的に12月と記す。）の2回実施した。これは、1000点満点のテストである。向後ほか（2009, 2010, 2012a, 2012b）、設楽ほか（2013, 2015）では、2008～2014年度の年度内2回の結果と2015年度4月の結果を報告したが、本稿¹⁾では2015年度4月と12月のCASECの結果を比較・報告する。

¹⁾ 本稿は、研究課題を「英語習熟度の2015年度内比較」、審査対象を「2015年12月の英語習熟度測定（CASEC）の結果の集計・分析・報告、2015年4月のCASECの結果の連結集計・分析・報告」とした、十文字学園女子大学の「人を対象とする研究倫理審査」を受け、2016年9月21日に承認された（受付番号2016-014）。

2. 総合得点の年度内変化

2015年4月にCASECを受けた1年生802名の内の一部が、同年度末12月に再度CASECを受けた。12月の測定に先立ち、本研究のデータの扱いに関する説明を受けた上、書面で協力に同意し、かつ、この年の4月と12月の両方を受けた学生は、合計620名であった。同意しなかった学生で4月または12月を受験した者の結果は、集計対象から外した。

2015年12月の測定（CASEC実施）に先立って、同意書と一緒に「今年度に参加したもの（日米英会話講座・学内外の英語研修・その他英語I以外の英語授業・学外の英会話レッスン）があればそれぞれの欄に○を」つけてもらうアンケート調査を実施した。どれか1つ以上の項目に○が付けられていれば2（有）、英語Iのみであれば1（無）として記録し、「英語Iのみか+ α か」の要因とした。2008年度から2012年度までの結果を報告した向後ほか（2009, 2010, 2012a, 2012b）、設楽ほか（2013）では、「英語I以外の英語授業」の受講の有無が年度内変化に影響したことを報告したが、今回の2015年度の結果報告では、日米英会話講座・学内外の英語研修・学外の英会話レッスンについても質問したので、2015年4月と12月の間の英語学習経験の違いについて、より多く情報を得られたと考えられる²⁾。

表1はこの集計結果であるが、福祉・文芸・M.C.ではほとんどの学生が「英語Iのみ」で、3学科全体でも1名しか「英語I+ α 」と回答しなかったため、これら3学科全体の集計も表1に加えてある。

表1 2015年入学生の4月と12月の総合得点の学科³⁾ 別基礎統計量

学科	英語Iのみ か+ α か	4月総合得点(点)				12月総合得点(点)				人数 小計
		最小	平均	最大	標準偏差	最小	平均	最大	標準偏差	
食栄	英語Iのみ	176	367.74	581	88.181	173	369.10	625	101.479	72
	英語I+ α	329	478.29	606	72.225	338	474.02	649	63.671	48
	総和	176	411.96	606	98.274	173	411.07	649	102.028	120
幼教	英語Iのみ	162	317.82	439	75.652	69	301.24	508	92.014	113
	英語I+ α	324	360.86	434	28.200	218	359.62	457	66.848	21
	総和	162	324.57	439	72.012	69	310.39	508	90.860	134
児教	英語Iのみ	159	305.17	444	66.610	174	327.67	432	69.055	36
	英語I+ α	252	422.92	554	69.385	240	420.76	569	74.425	25
	総和	159	353.43	554	89.015	174	365.82	569	84.430	61
心理	英語Iのみ	176	355.59	582	96.266	131	344.70	578	100.411	71
	英語I+ α	257	403.75	592	87.816	211	386.15	534	84.890	20
	総和	176	366.18	592	96.114	131	353.81	578	98.290	91
健栄	英語Iのみ	97	340.36	600	101.870	127	325.64	641	108.244	78
	英語I+ α	162	327.32	474	89.272	170	327.74	437	67.329	19
	総和	97	337.80	600	99.222	127	326.05	641	101.235	97
生情	英語Iのみ	121	313.51	544	94.904	127	322.38	526	99.056	47
	英語I+ α	305	372.71	454	54.954	265	379.43	457	64.067	7
	総和	121	321.19	544	92.531	127	329.78	526	96.721	54
福祉	英語Iのみ	112	339.42	520	81.294	101	327.44	478	86.735	36
文芸	英語Iのみ	172	349.06	485	90.747	168	335.44	471	90.293	18
M.C.	英語Iのみ	152	290.25	447	96.526	176	331.75	496	107.002	8
福祉, 文芸, M.C.	英語Iのみ	112	335.87	520	86.532	101	330.32	496	88.968	62
	英語I+ α									1
	総和	112	333.67	520	87.596	101	329.73	496	88.373	63
全 9学科	英語Iのみ	97	335.56	600	89.906	69	329.68	641	98.224	479
	英語I+ α	252	412.83	606	90.558	170	409.38	649	87.385	141
	総和	97	353.13	606	95.643	69	347.81	649	101.466	620

²⁾ 2015年度については、英語I以外を履修しているかどうかという履修登録資料は全く利用していない。

³⁾ 人間生活学部の各学科を略称で示した。幼教=幼児教育学科、児教=児童教育学科、心理=人間発達心理学科、福祉=人間福祉学科、食栄=食物栄養学科、健栄=健康栄養学科、文芸=文芸文化学科、生情=生活情報学科、M.C. (図中ではメコと略す)=メディアコミュニケーション学科。

この620名の総合得点を「学科」×「英語Ⅰのみか+ α か」×「2回測定」の3要因で分散分析した結果、「学科」要因は自由度8、 F 値9.897で、有意確率は0.1%水準で有意であり、「英語Ⅰのみか+ α か」要因は自由度1、 F 値6.804で、有意確率は1%水準で有意であり、「学科」×「英語Ⅰのみか+ α か」の交互作用は自由度6、 F 値4.606で、有意確率は0.1%水準で有意であったが、「学科」×「英語Ⅰのみか+ α か」×「2回測定」である2次の交互作用は有意ではなく、「2回測定」要因とそれ以外の1要因との組み合わせも有意ではなかった。

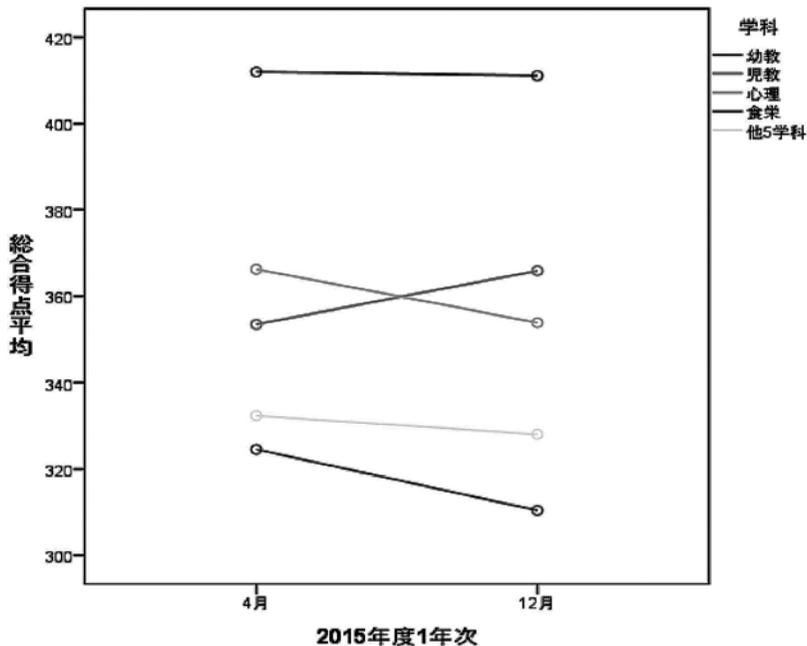


図1 「学科グループ」別の総合得点平均の年度内変化⁴⁾

総合得点の4月と12月のそれぞれにおける「学科」×「英語Ⅰのみか+ α か」の単純主効果の検定の結果、4月は自由度8、 F 値7.56で、有意確率は0.1%水準で有意であった。12月も自由度8、 F 値6.73、0.1%水準で有意であった。

次に、「英語Ⅰのみか+ α か」の区別をつけず、同データを「学科」×「2回測定」の2要因で分散分析した結果、「2回測定」の効果は有意ではなかったが、「学科」×「2回測定」の交互作用は自由度8、 F 値2.271、5%水準で有意であり、「学科」の効果も自由度8、 F 値11.347、0.1%水準で有意であった。4月の総合得点を2学科間で比較すると、食栄と心理（5%水準、45.78点差）、食栄と児教（0.5%水準、58.53点差）、食栄と福祉（0.5%水準、72.54点差）、食栄と健栄（0.1%水準、74.15点差）、食栄と幼児（0.1%水準、87.39点差）、食栄と生情（0.1%水準、90.77点差）、食栄とM.C.（1%水準、121.71点差）、心理と幼児（5%水準、41.61点差）の間で有意な差があった。12月は食栄と児教、食栄とM.C.の間の差が有意でなくなり、児教と幼児（1%水準、55.43点差）、心理と幼児（5%水準、43.43点差）の間な

⁴⁾ 図1の凡例は、4月の降順に食栄、心理、児童、他5学科、幼児である。

どで有意な差があった。この620人の総合得点データを「食栄・心理・児教・幼教・他5学科」の「5学科群」×「2回測定」の2要因で分散分析した結果、「2回測定」、「5学科群」×「2回測定」の効果は有意ではなかったが、「5学科群」の効果は自由度4、 F 値22.629、0.1%水準で有意であった。つまり、この5学科群よりも詳しい区別をすると上記のように4月も12月も有意なものが多く、この差はおおむね年間を通して変わらず、図1のような結果であった。グラフのそれぞれの直線の増減は誤差の範囲内である。

3. 「学科グループ」・「英語Ⅰのみか+ α 」別の年度内変化

話を総合得点の「学科」×「英語Ⅰのみか+ α 」×「2回測定」による分析に戻すと、上記のように、2015年度の2回測定総合得点データでは、「学科」要因が有意であったが、この9学科をBonferroniの方法で多重比較すると、食栄は幼教・児教・心理・福祉・健栄・生情・M.C.の7学科よりも平均点が1%水準で有意に高かった。食栄と文芸の平均点の差は、なぜか有意ではなかった。「文芸と食栄」以外の7学科と文芸の平均値の差は有意ではないので、食栄とそれ以外、という区別のみに有意であるといえよう。

そこで、食栄とそれ以外の学科で年度内変化を比較してみると、表2のようになった。

表2 2015年入学生の4月と12月の総合得点の学科グループ別統計量

学科	英語Ⅰのみか+ α	4月総合得点(点)				12月総合得点(点)				人数小計
		最小	平均	最大	標準偏差	最小	平均	最大	標準偏差	
食栄	英語Ⅰのみ	176	367.74	581	88.181	173	369.10	625	101.479	72
	英語Ⅰ+ α	329	478.29	606	72.225	338	474.02	649	63.671	48
	総和	176	411.96	606	98.274	173	411.07	649	102.028	120
食栄以外	英語Ⅰのみ	97	329.86	600	89.110	69	322.71	641	96.093	407
	英語Ⅰ+ α	252	379.04	592	80.155	170	376.02	569	79.020	93
	総和	97	339.01	600	89.510	69	332.62	641	95.369	500
全学科	英語Ⅰのみ	97	335.56	600	89.906	69	329.68	641	98.224	479
	英語Ⅰ+ α	252	412.83	606	90.558	170	409.38	649	87.385	141
	総和	97	353.13	606	95.643	69	347.81	649	101.466	620

この620名の総合得点を「学科グループ(食栄かそれ以外か)」×「英語Ⅰのみか+ α 」×「2回測定」の3要因で分散分析した結果、「学科グループ」要因は自由度1、 F 値58.915で、有意確率は0.1%水準で有意であり、「英語Ⅰのみか+ α 」要因は自由度1、 F 値75.165で、有意確率は0.1%水準で有意であり、「学科グループ」×「英語Ⅰのみか+ α 」の交互作用は自由度1、 F 値9.490で、有意確率は0.5%水準で有意であった。が、「学科グループ」×「英語Ⅰのみか+ α 」×「2回測定」である2次の交互作用は有意ではなく、「2回測定」要因とそれ以外の1要因との組み合わせも有意ではなかった。つまり、4月に食栄とその他8学科には平均値に1000点満点中40点から100点程度の差がついており、12月にもその差は埋まらなかった。また、「食栄_英語Ⅰ+ α 」群も「非食栄_英語Ⅰ+ α 」群も4月の総合得点は「英語Ⅰのみ」より高く、この差は12月にも保存され、「非食栄_英語Ⅰのみ」群では、5%水準で4月より12月の得点が有意に3.0点下がったが、そのほかの3群では、4月と12月の平均値の差は有意ではなかった。この様子を示すのが、図2である。この結果は、個々の学生たちの英語学習努力やその効果の有無を意味しないが、全体的には、平均的な習熟度の新生が入学当時の力を維持するために

は、「英語 I」だけでは十分ではなかったことを客観的に示している。まして、2年次以降に全く英語学習を怠ってしまった場合、1年次にはおおむね保存されたともみえる英語力の保存は保証されない。

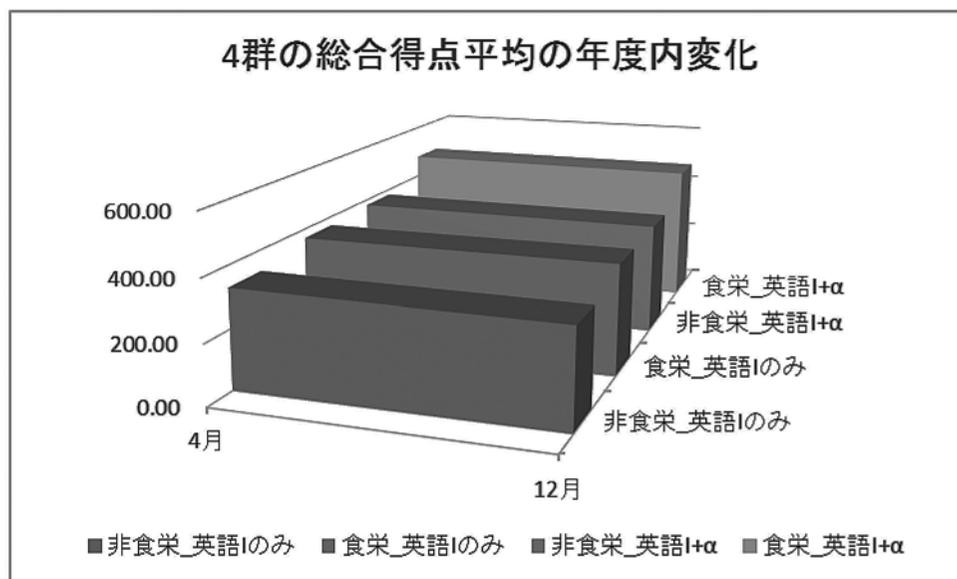


図2 「学科グループ」・「英語 I のみか+αか」別の総合得点平均の年度内変化⁵⁾

4. 習熟度4群（全学科）の年度内変化

向後ほか（2009, 2010, 2012a, 2012b）、設楽ほか（2013）では、2008~2012年度の各年度について、共通の7段階の習熟度尺度〔AA（CASEC総合得点1000~880）、A（879~760）、B（759~600）、C（599~450）、D（449~390）、E（389~0）〕を用いて人数の割合の年内変化を全学科と各学科別に示した。設楽ほか（2015）の2013年度と2014年度の報告では紙面の都合で同様の報告を割愛したが、本節で2015年度について報告する。

本稿の分析対象者620名には、4月のみ受験し12月に受験しなかった人や、調査協力に同意しなかった人は含まれていないので、4月は最高点などのデータが設楽ほか（2015）で報告したものと必ずしも一致しない。2012年度までと同様に、2015年度にもBからEまでの4段階が認められた。向後ほか（2009）で述べたように、これらは、大まかに英検の2、準2、3、4級以下に相当すると考えられる。

2015年の各学科内の習熟度B~Eの人数の割合を表3に示し、表2と図2の4群の習熟度別人数の割合の変化を図3、4に表示する。

表3では、0人の欄を濃い色で塗ったが、Bに達している学生は稀であった。また、4, 12月の「食栄_英語I+α」群、4, 12月の「児教_英語I+α」群を除くと、年間を通して全学科で、最も人数の多

⁵⁾ グラフ下の4群の凡例は、4月も12月もグラフ内の手前から奥への順番で平均点が昇順である。

い習熟度はEであった。全学のE段階の学生の割合は、2008年が45.4%、2009年が47.2%、2010年が47.0%、2011年が54.6%、2012年度が54.6%であった（向後ほか 2009, 2010, 2012a, 2012b, 設楽ほか 2013）が、本稿の2015年度4月のEの割合は71.2%にまで増えており、2015年のC, D段階を合わせた割合は、2008, 09年のC段階だけの割合よりも少ない。このような習熟度状況を次年度のクラス編成や教材選択に活用するべきであり、CASECのような精度の高いツールの利用復活はぜひとも必要である。

表3 各学科（グループ）の「英語Ⅰのみか+αか」別の習熟度別人数の年度内変化

学科	人数	英語Ⅰのみか かどうか	4月習熟度（人）				12月習熟度（人）			
			E	D	C	B	E	D	C	B
食栄	120	英語Ⅰのみ	44	14	14	0	42	13	16	1
		英語Ⅰ+α	7	7	33	1	4	9	34	1
幼教	134	英語Ⅰのみ	89	24	0	0	93	16	4	0
		英語Ⅰ+α	18	3	0	0	12	8	1	0
児教	61	英語Ⅰのみ	33	3	0	0	29	7	0	0
		英語Ⅰ+α	4	10	11	0	7	9	9	0
心理	91	英語Ⅰのみ	47	8	16	0	46	13	12	0
		英語Ⅰ+α	7	6	7	0	9	7	4	0
健栄	97	英語Ⅰのみ	55	10	12	1	53	14	10	1
		英語Ⅰ+α	14	4	1	0	15	4	0	0
生情	54	英語Ⅰのみ	36	7	4	0	32	12	3	0
		英語Ⅰ+α	5	1	1	0	3	3	1	0
福祉	36	英語Ⅰのみ	26	8	2	0	27	8	1	0
文芸	18	英語Ⅰのみ	11	4	3	0	13	2	3	0
メコ	8	英語Ⅰのみ	7	1	0	0	6	0	2	0
福祉, 文芸, メコ	63	英語Ⅰのみ	44	13	5	0	46	10	6	0
		英語Ⅰ+α	1	0	0	0	1	0	0	0
食栄以外	500	英語Ⅰのみ	304	65	37	1	299	72	35	1
		英語Ⅰ+α	49	24	20	0	47	31	15	0
全学科	620	英語Ⅰのみ	348	79	51	1	341	85	51	2
		英語Ⅰ+α	56	31	53	1	51	40	49	1

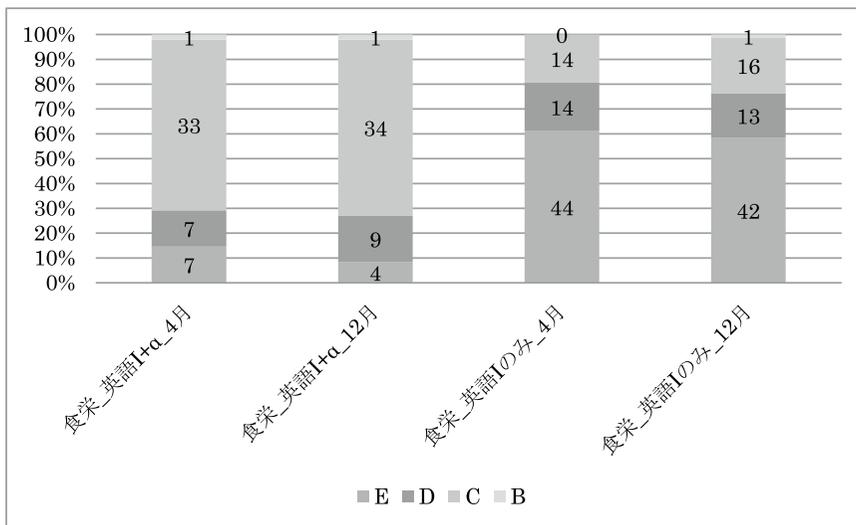


図3 2015年度内の食栄の2群（英語Ⅰのみか+αか）による習熟度割合の変化

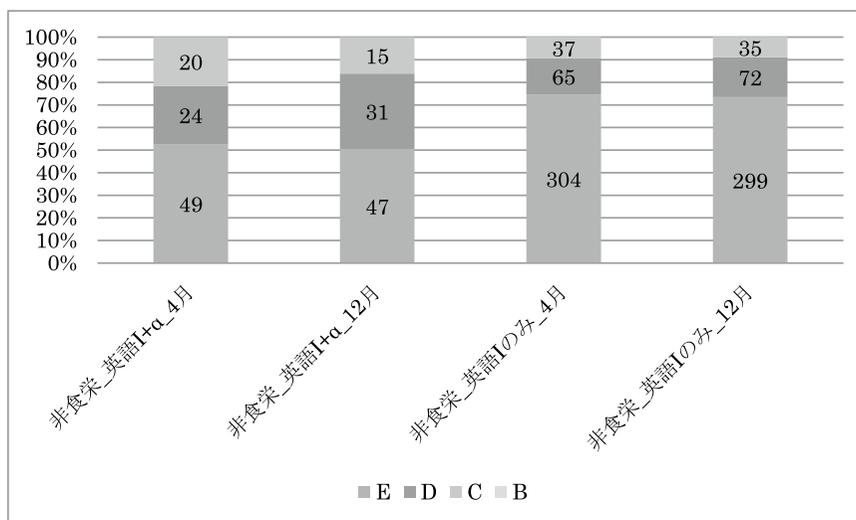


図4 2015年度内の食栄以外の8学科の2群（英語Iのみか+αか）による習熟度割合の変化

表2、図2の4群内の習熟度構成を可視化したのが、図3、4である。これらの4群は、それぞれ習熟度構成が年間を通してあまり変化しなかった。上記のように平均点に有意な差が出たのが図4の右半分の「非食栄_英語Iのみ」群であるが、習熟度構成比にまで影響を及ぼすような点数の変化はみられなかった。

5. 各セクションの年度内変化

CASECの総合得点は、4セクションの得点の合計点である。前半の§1（語彙問題）と§2（語法問題）には音声がない。一方、§3は大意把握のリスニング問題、§4は聞き取った内容をキーボードで入力する問題で、画面情報だけでなく音声も流れる。本節で、各セクションに関する考察をする前に、まず、リスニング（後半2セクションの音声を伴う問題）について、第2節で総合得点に対して行ったのと同じ分析を行う。

620名のリスニング得点を「学科」×「英語Iのみか+αか」×「2回測定」の3要因で分散分析した結果、「学科」要因は自由度8、 F 値8.040、0.1%水準で有意であり、「英語Iのみか+αか」要因も自由度1、 F 値6.891、1%水準で有意であった。

2次の交互作用、「2回測定」×「学科」、「2回測定」の効果は有意ではなかったが、「英語Iのみか+αか」×「2回測定」の交互作用は自由度1、 F 値は4.236、5%水準で有意であった。

「英語Iのみ」群の4月のリスニング得点において、2学科間を比較すると、食栄と幼教（5%水準）の間にしか平均点の有意な差はみられず、12月においても食栄と幼教（1%水準）の間にしか平均点の有意な差はみられなかった。

「英語I+α」群においては、有意な差がある学科ペアが増え、4月の食栄と幼教（0.1%水準）、食栄と健栄（1%水準）、児教と健栄（1%水準）の間に有意な差が出、12月にも食栄と幼教（0.1%水準）、食栄と健栄（0.1%水準）、児教と健栄（5%水準）の間に有意な差が出た。リスニングについては、4

月に元々高得点な傾向のある「食栄_英語 I + α 」が、幼教・児教・健栄との差を12月にはより明らかにさせたようである。

§ 4は§ 3と同様にリスニングであるが、前半(§ 1, 2)と§ 3の解答はマウス操作で行うのに対して、§ 4の解答時には聴き取った音声を文レベルで入力する。英文のキーボード操作は入学時においてと1年後とで、学科による差があったであろうか。

§ 4の620名の得点を「学科」×「英語 I のみか + α か」×「2回測定」の3要因で分散分析した結果、「2回測定」、「2回測定」と他のどちらかの要因、「2回測定」×「学科」×「英語 I のみか + α か」の効果は有意ではなかった。このデータ全体の2学科間の比較では、食栄と児教・心理・文芸との有意差はみられないが、以下、平均点差の昇順に、食栄と生情(5%水準、19.19点差)、食栄と幼教(0.1%水準、19.99点差)、食栄と福祉(0.1%水準、22.16点差)食栄と健栄(0.1%水準、23.43点差)、食栄とM.C.(0.5%水準、36.45点差)の間に有意な差がみられた。このような結果となったのは、生情の入学生たちにとって、元々4月にキーボード操作に困難が他よりも少なかったからではないかと思われる。

§ 4の生情の年度内の変化を知るために、4月の§ 4の得点だけで9学科間を比較すると、食栄と「児教・心理・文芸」それぞれとの間に有意な差はなく、食栄と幼教(0.1%水準、18.88点差)、食栄と生情(5%水準、19.59点差)、食栄と福祉(1%水準、19.72点差)、食栄と健栄(0.1%水準、22.84点差)、食栄とM.C.(0.5%水準、41.32点差)の間に有意な差がみられた。しかし、12月の§ 4の得点では、食栄と児教・心理・生情・文芸・M.C.⁶⁾との間に有意な差はなく、食栄と幼教(0.1%水準、21.10点差)、食栄と健栄(0.1%水準、24.01点差)、食栄と福祉(0.5%水準、24.59点差)の間に有意な差が認められた。つまり、§ 4の得点において4月に「食栄・児教・心理・文芸」というグループがあったが、12月までに生情はこの上位群に加わったのである。PCを使うCASECというツールと生情の学生との相性の良さが伺え、こう考えると、設楽・向後(2015)で生情/社情が年内向上を示したのもこれが一因であった可能性が出てくる。

次に、§ 1(音声なしの語彙問題)の620名の得点を「学科」×「英語 I のみか + α か」×「2回測定」の3要因で分散分析した結果、「2回測定」、「2回測定」と他のどちらかの要因、「2回測定」×「学科」×「英語 I のみか + α か」による有意な差はみられなかった。「学科」の効果は自由度8、 F 値は7.310で0.1%水準で有意であった。「英語 I のみか + α か」の効果も自由度1、 F 値は4.106、5%水準で有意であった。「学科」×「英語 I のみか + α か」の効果は自由度6、 F 値は4.077、0.5%水準で有意であった。4月と12月全体の学科間の比較では、食栄は文芸を除く7学科との間で有意差があり、総合得点と同様な結果であった。

§ 2(音声なしの語法問題)の620名の得点を「学科」×「英語 I のみか + α か」×「2回測定」の3要因で分散分析した結果、「2回測定」、「2回測定」と他のどちらかの要因、「2回測定」×「学科」×「英語 I のみか + α か」による有意な差はみられなかった。「学科」の効果は自由度8、 F 値は8.322で0.1%水準で有意であり、「学科」×「英語 I のみか + α か」の効果は自由度6、 F 値は4.066で0.5%水準で有意であったが、「英語 I のみか + α か」の効果は有意ではなかった。4月と12月全体、4月、12月における学科間の比較は、§ 1や総合得点と同様の結果であった。

⁶⁾ 12月のM.C.では、サンプル数の少なさのため差が検出されなかったものと思われる。サンプル数は4月も同一であるが、計算上の平均値の差が、食栄との間でわずかに狭まったものと考えられる。

§ 3 (大意リスニング) の620名の得点を「学科」×「英語 I のみか+ α か」×「2回測定」の3要因で分散分析した結果、「2回測定」、「2回測定」×「学科」、「2回測定」×「学科」×「英語 I のみか+ α か」による有意な差はみられなかったが、「学科」は自由度8、 F 値6.475で0.1%水準で有意であり、「学科」×「英語 I のみか+ α か」も自由度6、 F 値2.251で5%水準で有意であった。4月の§3の得点を各学科間で比較すると食栄と健栄(0.1%水準、17.71点差)、食栄と幼教(0.1%水準、19.99点差)の間のみ有意な差があり、12月の§3では、食栄と健栄(0.1%水準、23.58点差)、食栄と幼教(0.1%水準、27.47点差)、児教と幼教(5%水準、18.59点差)の間のみ有意であった。「2回測定」×「英語 I のみか+ α か」の効果は自由度1、 F 値3.946で5%水準で有意であった。

4つのセクションでは、「2回測定」が関係する有意差の出たのは§3だけなので、より詳しく「2回測定」×「英語 I のみか+ α か」を比較するため、「英語 I + α 」と回答した学生が合計で1名しかいなかった「福祉・文芸・M.C.」3学科63名のデータを除く557名の§3の得点を「6学科」×「英語 I のみか+ α か」×「2回測定」の3要因で分散分析した。その結果、「2回測定」、「2回測定」×「6学科」、「2回測定」×「英語 I のみか+ α か」、「2回測定」×「6学科」×「英語 I のみか+ α か」の効果は有意ではなかったため、結局§3においても「2回測定」に關係する効果はなかったこととなった。なお、「6学科」(自由度5、 F 値9.970、0.1%水準)も「英語 I のみか+ α か」(自由度1、 F 値21.808、0.1%水準)も「6学科」×「英語 I のみか+ α か」(自由度5、 F 値2.445、5%水準)も有意であった。

図5、6に620名の§3の得点平均値を5学科群「『食栄』・『健栄』・『幼教』・『児教』・『他5学科』」、「英語 I のみか+ α か」によって図示した。図4は「英語 I のみ」と回答した学生の4月と12月の§3の学科群別グラフである。そして、図5は、「英語 I + α 」と回答した学生の4月と12月の§3の学科群別グラフである。これら10本のそれぞれの増減は、いずれも有意ではない。なお、図6の「他5学科」というのは事実上「心理・生情」の2学科である。

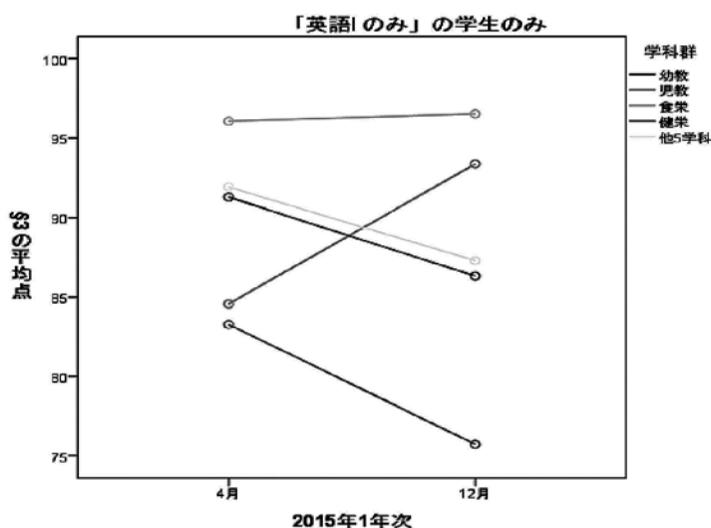


図5 2015年度「英語 I のみ」の学生の5学科(群)ごとの§3の得点の変化⁷⁾

⁷⁾ 図5の凡例は12月の降順に食栄、児教、他5学科、健栄、幼教である。

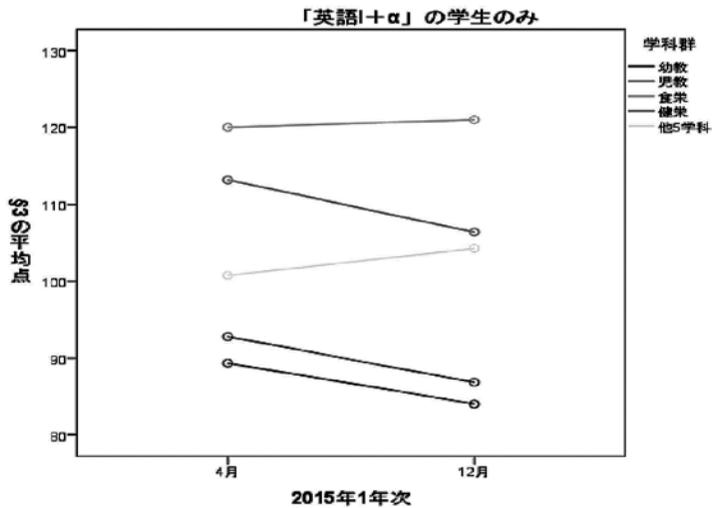


図6 2015年度「英語I+α」の学生の5学科(群)ごとの§3の得点の変化⁸⁾

4つのセクションの得点は同じ比重で単純に総合得点に加算されるが、セクション間の関係について、設楽・向後(2015)は、2015年度1年次4月の632名のデータのM.C.以外の7学科でピークが§3にあったことを報告した(M.C.のピークは§2にあった)。また、前半内の§1(語彙)と§2(語法)を比べると、幼教のみ§1>§2であり、他の8学科ではどちらかというと反対であったことを報告した。これらの違いは本稿の620名の4、12月のデータではどうなっているかをみるために、図7、8を作成した。

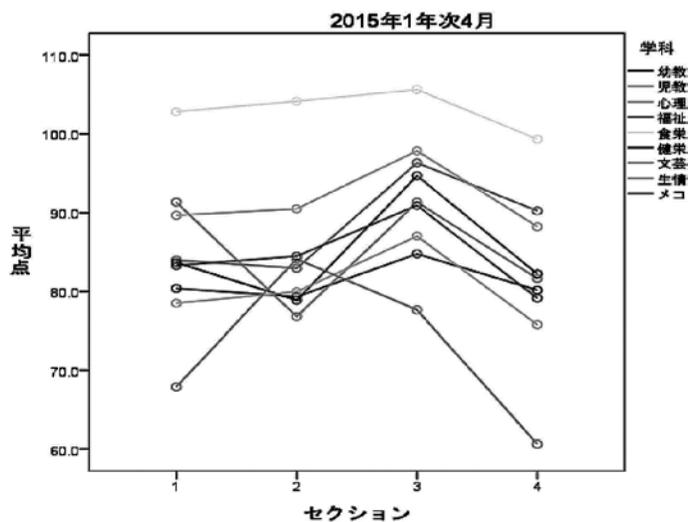


図7 2015年度1年次4月の学科別・セクション別得点⁹⁾

⁸⁾ 図6の凡例は4、12月とも降順に食栄、児教、他5(2)学科、幼教、健栄である。

⁹⁾ 図7の凡例は§3の降順に食栄、心理、児教、福祉、文芸、健栄、生情、幼教、M.C.である。

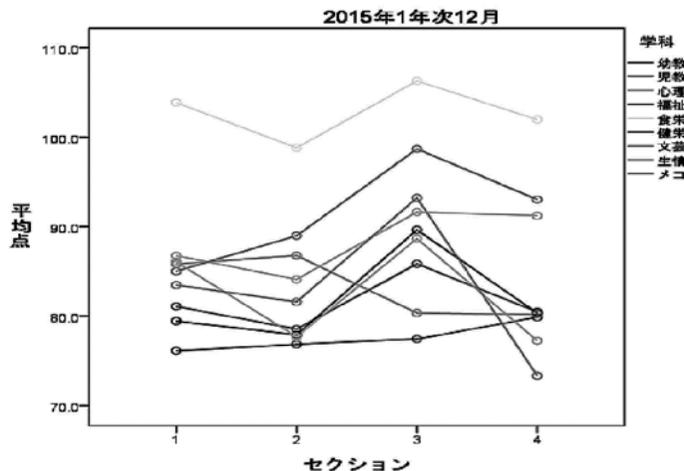


図8 2015年度1年次12月の学科別・セクション別得点¹⁰⁾

本稿のM.C.のサンプル数は10に満たなく、設楽・向後（2015）の同学科17人のおよそ半数であるが、17人が4月に見せていた§2のピークは、図7でも明らかであった。しかし、設楽・向後（2015）の幼教185人においては§1>§2だった特徴が、本観察の同学科134名ではそれほど目立たず、文芸の4月に§1>§2の関係がみられた。図8では、生情で§3と4がほとんど同じで§4が他学科のように他のセクションより落ち込まず、総合得点に寄与した様子を読み取れる。

6. おわりに

以上をまとめると、2015年度1年次に関して、以下の4点が観察された。

- (1) CASEC総合得点については、4月に食栄とその他の学科には1000点満点中40点から100点程度の差がついており、12月にもその差は埋まらなかった。また、2015年度に学内外で英語I以外の何らかの英語を選択したグループは、食栄でもその他でも4月の総合得点の高い層であり、この差は12月にも保存された。「食栄以外の8学科」かつ「英語Iのみ」のグループでは、4月より12月の得点が有意に下がった。
- (2) 2015年度1年生全体の英語習熟度は、段階Bに達している学生は稀であった。また、4,12月の「食栄_英語I+ α 」群、4,12月の「児教_英語I+ α 」群を除くと、年間を通してすべての学科で、最も人数の多い習熟度はE段階であった。
- (3) 「英語Iのみか+ α か」・「食栄かどうか」別の4群の習熟度構成比は、年間を通してあまり変化しなかった。
- (4) CASECの§1、§2、§3、後半（音声のある§3+音声のある§4）は、総合得点でみたのと同様に、4月に元々高得点な傾向のある「食栄_英語I+ α 」が幼教・児教・健栄との差を12月にはより明らかにさせたようである。§4は解答に英文キーボード操作を必要とする点が特別で、4月も12月も多くの学科で§3の得点が高いのと対照的に、12月の生情だけは§3 \approx §4で

¹⁰⁾ 図8の凡例は§3の降順に食栄、児教、幼教、心理、福祉、生情、健栄、文芸、M.C.である。

あった。

2008年以来全入学者の習熟状況は毎年急激には変化しないので、この習熟度状況を来年度のクラス編成や教科書選定に活かすべきである。以上のような2015年度入学生たちの英語習熟度状況を考えると、CASECのような精度の高いツールはこれからも必要であり、大学として再び採用されることを希望したい。

<<参考文献>>

向後朋美・島村豊博・森美榮・設楽優子（2009）「2008年度CASEC結果報告と共通英語教育」、『社会情報学論叢第13号』2009, 141-165, 十文字学園女子大学.

向後朋美・島村豊博・設楽優子（2010）「2009年度CASEC結果報告と共通英語教育」、『社会情報学論叢第14号』2010, 99-128, 十文字学園女子大学.

向後朋美・島村豊博・設楽優子（2012a）「2008～2010年度CASEC結果の総括と共通英語教育」、『社会情報学論叢第15号』2012, 23-55, 十文字学園女子大学.

向後朋美・島村豊博・設楽優子（2012b）「2011年度外国語選択状況とCASEC結果報告」、『人間生活学部紀要第10号』2012, 199-211, 十文字学園女子大学.

設楽優子・島村豊博・向後朋美（2013）「2012年度外国語選択状況とCASEC結果報告」、『人間生活学部紀要第11号』2013, 177-189, 十文字学園女子大学.

設楽優子・向後朋美（2015）「英語習熟度の経年比較：2015年の結果の考察」、『十文字学園女子大学紀要第46号』2015, 127-137, 十文字学園女子大学.